



乗って楽、引いて楽

# 無理ない走行を実現する 銅合金製人力車

「アラヨッ！」イナセなかけ声とともに走り出す人力車。この人力車、いつ頃、どこで生まれたかご存じだろうか。諸説あるのだが、明治2年、職人3人のグループが考案し、翌3年東京府に製造・営業を出願したという記録が残っている。これが最も有力な説である。とすると誕生して130年以上経つことになる。彼らは宣伝の場として日本橋畔を選び、ここで客待ちをした。これが大成功で、さっそく錦絵にも描かれることとなり、1年半後の明治4年末には東京の人力車の数は1万台余にもなったそうである。その人気は全国に広がり、明治21年には21万台を数えることとなった。その後は自動車の普及などとともに衰退し、現在では全国で550台、観光地などでしか見られなくなってしまった。

この人力車の無理のない走行を支えているのが銅合金なのである。

静岡県伊東市宇佐美温泉天気山。いかにもあたたかそうなこの地に人力車づくりに命をかける男がいる。全国にある550台の人力車のうち468台がこの人の手によるもの。(株)升屋製作所 社長河野茂さんである。

人力車作りをはじめたのは、昭和46年のこと。刀かじから始まり自動車の修理工場、農機具づくりなどさまざまな職業を経



陽光に輝くホロ支持金物、ドロ除け



引き手金物には河野さんの「銘」が入る

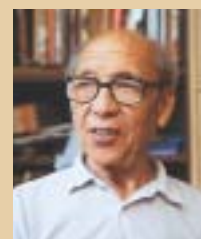


めっき前の銅合金製部品

験。そんな中で生活用具の博物館を作ろうと思い立ち、骨董品をあさった。明治時代に作られたおんぼろ人力車が手に入った。修理して結婚式場に飾るとこれが評判になり、神社や観光地からひっきりなしの注文。

「部品は573個。このうち車輪とバネ以外はすべて真鍮、青銅などの銅合金製。乗って楽、引いて楽の人力車作りを考えていくと、軽く、加工性のよい銅合金に行きついた。ドロ除け、ポディアンカー、アンカープレート、ハブナットなど銅合金製の部品は大小さまざま。部品にはめっきを施しているので完成してしまうと銅色は見えないが、人力車はまさに銅で支えられている。」

遅いことがぜいたくな時代。時計を少しだけゆっくりまわし、ぜいたくな時間を人力車で味わうのも一興だ。



河野 茂さん